OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イギリス労働運動と議会主義 リブ＝ラブ主義からプログレッシヴィズムへ
Author(s)	佐喜眞, 望
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49427
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【60】

氏名	佐喜眞（さきま）　望（のぞみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　２２４０９　号
学位授与年月日	平成20年８月４日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	イギリス労働運動と議会主義　リブ＝ラブ主義からプログレッシヴィズムへ
論文審査委員	（主査） 教　授　秋田　茂 （副査） 教　授　藤川　隆男　　准教授　中野耕太郎

論文内容の要旨

本論文は、申請者が過去約30年にわたって行ってきた、19世紀後半のヴィクトリア朝中期・後期のイギリス政治社会史研究を、自由党と労働運動指導者層との政治的協力＝「リブ＝ラブ主義」の盛衰に着目して一冊の研究書としてまとめたものである。全体は、序に相当する「はじめに」に続き、全10章、361ページで構成される。

「はじめに」では、リブ＝ラブ主義の政治史的意義に着目することで、自由主義の伝統を正当に評価することで近代イギリス政治史像を再考するという本論文の目的と、それに関連したイギリス政治史・労働史の領域における研究史が整理されている。

第一章から第三章までは、19世紀中葉におけるリブ＝ラブ主義の政治的形成過程が、1867年の第二次選挙法改正の政治過程を中心に明らかにされる。

第二次選挙法改革は、自由党の指導者グラッドストンを中心に展開・実現された。第一章では、選挙法改革運動に対するグラッドストンの姿勢の変化、その背後にあり中産階級の急進主義者の援助を受けたリブ＝ラブ派「改革連盟」の政治的圧力団体としての活動が明らかにされる。第二章では、選挙法改革と連動した議席再配分問題が、改革連盟と提携した自由党執行部の動き、それに対抗して都市部における影響力確保をねらう保守党の政策から論じられる。第三章は、「全国保守国制擁護連合同盟」の活動を軸に、保守党の立場から、形成過程にあったリブ＝ラブ主義の政治史的意義が分析されている。以上の三章を通じて、世紀中葉におけるリブ＝ラブ主義の政治的影響力が、全国レヴェルのイギリス政治史の文脈で明らかにされる。

第四章から第七章までは、「労働貴族」論との関連で、職場や日常生活を通じたリブ＝ラブ主義の背景、その形成の思想史的要因が論じられる。

第四章と第五章では、従来の日本における研究史で、熟練労働者を中核とする労働者階級上層部＝「労働貴族」層の代弁者とみなされてきた、サミュエル・スマイルズの労働組合論・労働者観が、彼の主要著作の詳細な分析を通じて明らかにされる。その結果、スマイルズと主要な労働貴族層（ジョージ・ハウエル、トマス・ダニング）の労働組合に対する見方は決定的に異なること、スマイルズの「自助」論はあくまでも個人主義にもとづく自立・努力であり、実はスマイルズが労働貴族層にとって最大の論敵であったことが明らかにされる。それをうけて第六章と第七章は、代表的な労働貴族の組合とされる「合同機械工組合」(ASE)と密接な関係を持ったトマス・ライトの著作を取りあげて、労働貴族層にとっての「自助」の意味を再考する。その結果、彼ら労働貴族は、仕事場での連帯、技能（スキル）の伝授と獲得を通じた仲間意識の涵養、独自のライフスタイルを通じて、中産階級とは全く異なる独自の世界観を生み出し、そこでは相互の連帯に基づく「集団的自助」の精神が重視されたことが明らかにされる。以上の四章の分析を通じて、19世紀中葉における労働貴族層は、中産階級とは異なる独自のアイデンティティと誇りを持ち続けたこと、その独自性がリブ＝ラブ主義にも反映され、政治的運動形態としてのリブ＝ラブ主義は、中産階級のイデオロギー的・文化的ヘゲモニーへの従属と、彼らの職場・労働現場での独自性という「二重性」を有していたことが明らかにされる。

第八章から第十章までは、1880年代末以降の世紀転換期におけるリブ＝ラブ主義の展開と変容の過程が、前述のジョージ・ハウエルと、後のイギリス労働党の指導者ラムゼー・マクドナルドの政治思想と関連づけて論じられる。特に第八章は、世紀末のリブ＝ラブ主義の変容過程に着目し、前章で指摘したリブ＝ラブ主義の「二重性」が、政治運動形成の論理であると同時に、その解体の論理でもあったこと、従って、リブ＝ラブ主義の歴史的位相を定めるに際して、運動形態としてのリブ＝ラブ主義と、政策としてのリブ＝ラブ主義とを区別して考えることが重要であることを指摘する。第九章と第十章では、リブ＝ラブ主義はその後、漸進的な改革を唱えるイギリス労働党のプログレッシヴィズムに引き継がれ、現代にいたるイギリス労働運動の議会主義の歴史的起源になったことが示唆されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス労働運動の議会主義の歴史的起源を、19世紀後半のリブ＝ラブ主義の形成・展開に求めるオリジナリティの高い研究である。

第一に、リブ＝ラブ主義を政治史的な文脈で再考することにより、自由党指導者グラッドストンを中心として形成された中産階級の急進主義と労働者階級上層部との協力関係、それが原動力となって世紀中葉のイギリスで推進された諸政治改革の歴史的背景が解明された。従来の研究では、伝統的エリート層である上流階級・ジェントルマン階層の優位・支配が強調されてきたが、本論文は、その対抗勢力として、中産階級の一部と労働者階級上層部との連携により形成された「リブ＝ラブ勢力」の政治的重要性を明らかにした点で、近代イギリス政治史を見直す新たな視点を提起している。

第二に、本論文は「労働貴族」をめぐる論争にも一石を投じた。19世紀後半に『自助論』(Self-Help)をはじめとする数多くの評論を生み出したサミュエル・スマイルズの思想を詳細に再検討することを通じて、スマイルズと熟練労働者を中心とする労働貴族層との価値

観・社会観の相違を明確にし、個人主義に基づくスマイルズが説く自助と、労働貴族層の「集団的自助」論との位相の相違を解明した点は高く評価できる。スマイルズを労働貴族層の代弁者とする学説は完全に論破されたといえる。さらに本論文は、トマス・ライトの著作の分析を通じて、労働貴族層の政治意識と日常生活レヴェルでの自意識の絡み合いを明らかにし、労働貴族論と政治史を接続する新たな観点を提示している。すなわち、運動形態としてのリブ＝ラブ主義と、政策としてのリブ＝ラブ主義とを峻別し、リブ＝ラブ主義の「二重性」を明らかにしたこの指摘は独創性であり、本論文の最も優れた論点である。

第三に、1880 年代末―20 世紀初頭の世紀転換期に見られた、新たな独立労働主義の台頭、労働党（労働代表委員会）の結成により、リブ＝ラブ主義が衰退・変質を余儀なくされていく政治過程と、新興のイギリス労働党のプログレッシビズム（漸進的改革主義）に旧来のリブ＝ラブ主義が継承されていく過程を描き出した点も評価できる。

本論文の独創性とメリットは以上の三点に要約できるが、問題が全くないわけではない。本論文は、体系的な思想を持っていた政治的指導者層と一部の労働貴族の政治的言説の分析に集中しているため、現実の諸改革実現のプロセス、その政治過程での妥協・取引を通じたイギリス政治特有の現実主義が必ずしも明らかにされたわけではない。しかしそれによって、イギリス政治社会史研究に新たな問題を提起した本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。